わたしはこう思う

一　何のための団体？

アチャリイヤ氏の文を読むと、氏の属しているという「嫉妬心反対の団体」なるものが、いよいよ滑稽に感じられる。いったいそういう仰々しい団体は、何のために生まれたものであるか。

氏によると、嫉妬心という野蛮行為は、男性が女性を物品として所有した後に始まった——言いかえれば私有財産制と共に始まったものであって、即ち自然的の本能ではなくて、人為的の支配欲に他ならないというのである。また女性の嫉妬心（氏は女性が一夫一婦を欲求する場合、それを嫉妬心の発現であると考えている）も、同じく自然的の本能ではなくて、男性から征服された後に生じた後天的の奴隷心であるといっている。すなわち氏によれば、性における嫉妬心は、男性にあっては支配欲、女性にあっては奴隷心の発現であるというのだ。かくて氏の属する「嫉妬心反対の団体」は、嫉妬心に対する右のような定義を土台として、「嫉妬心撲滅の運動」に従事している。

嫉妬心に対するこの解釈は、全然に当っていないとはいわれまい。今日における男女の嫉妬心は、氏等のいうが如く、自然的の本能ではなくて、人為的の支配奴隷の関係から生じた欲望であることも多い。だが、それだからといって、全部がそうであるということはできないのである。例えばアチャリイヤ氏によれば、男性の嫉妬心は「女性を財産制度的に所有した後」に生じた後天的の欲望であるけれども、われわれが生物研究者について学んだところによると、動物界における一女性を中心とする男性間の闘争は、本能的嫉妬の現われであるという。もしそうであれば、これは男性が女性を「財産制度的に所有した後」の出来ごとではない。ばかりではなく、男性が女性に「自然的にすらも受け入れられない前」の出来ごとである。このとき男性の嫉妬心は自然的の本能であって、制度によって生じた後天的の欲望ではない。この点アチャリイヤ氏の定義は的はずれである。

また、アチャリイヤ氏は女性の一夫一婦欲求を、奴隷心にもとづく嫉妬の感情の現われであるといっているが、女性の一夫多婦欲求（一夫多婦は支配者男性の特権的習慣であるが、いかに奴隷的な女性でも、その習慣に対して、心からの賛意を表示したことはない。古来、女性にあって嫉妬とよばれているのは、男性のこの特権に対する女性の否定的態度——即ち男性に対して一婦を愛せよと主張する女性の正義的態度をいった場合が多い）ならばともかく、一夫一婦欲求を奴隷心の発現であると見てしまうことはできない。のみならず女性が男性に対して、永続的もしくは瞬間的に、一婦への愛（分裂せざる真摯な愛）を要求することは、女性が自己の性（分裂せざる真摯な愛）を基礎として生殖することを自

然とする）に目覚めれば目覚めるほど、否定することのできないものとなるであろう。アチヤリイヤ氏によれば、一夫一婦婚は、女性が男性に征服された後の性的様式であって、乱婚的の性的様式こそ、最も自由的なものであるかの如くであるが、われわれが社会研究者について学ぶところでは、乱婚必ずしも自由社会の性的様式ではなく、かえって一夫一婦婚の痕跡の顕著なものがあることは、誰しも知っている通りである。即ち一夫一婦婚およびそれへの欲求のすべてを、女性の奴隷的嫉妬心に根ざしているものであるとするアチヤリイヤ氏等の断定は、はなはだ偏狭なものであるというほかはない。動物界にあっても鳥類の如きは一夫一婦婚であり、このことは、一夫一婦婚が必ずしも人間社会の支配制度にもとづく後天的の様式ではなく、自然的本能的の様式でもあることを物語るものである。否、むしろわれわれはこういおうとしている。一夫一婦婚こそ（永続的、瞬間的の）最も正しい性的様式であって、一夫多婦や、多夫多婦や、多夫一婦等のごとく、社会制度的に「規定」された性的様式こそ錯誤的のものであると。そしてわれわれは、これを乱婚と名づける。然るとき、われわれは有史以来の支配制度的の結婚様式にして、未だかって一夫一婦婚あるを見ないのである。（この点われわれはアチヤリイヤ氏と全然に意見を異にしている）

　われわれのいう一夫一婦婚とは、言いかえれば自然婚ともいうべく、時に多夫多婦、多夫一婦、一夫多婦等の観を呈することがあっても、永続または瞬間の結合の単位は、完全に一夫一婦の分裂せざる真摯な恋愛に基礎づけられているのである。それに反して乱婚の

場合は、性を物品的のものとなし、従って生殖器に対する私有的、もしくは共有的の観念を基礎とするのである。またかくの如き観念は、性的様式を、一定の型に規定せんとする人為的の制度、もしくは運動を発生する。いまアチヤリイヤ氏等の運動を見ると、それは単なる「嫉妬心の撲滅運動」ではなくて、それによって、男性および女性（特に女性）を、私有的の性的様式から、共有的の性的様式へと移行せしめんとする目的をもつものである。

　アチヤリイヤ氏は一夫一婦的の性関係を否定して、分割されたる性関係を正しいと規定している。だが、われわれが真に性の自然に目ざめるならば、かくの如く、性的様式を一定の型に規定することは、全然に不可能である。まして氏等の如く、きわめてあやふやな「嫉妬心」の定義を土台としてのそれである場合、われわれはむしろ氏等のかかる仰々しい団体およびその運動を以て、正しい性的自覚および研究に立脚するものではなく、氏等それ自身の、特殊的の性的「必要」から生じたものではないかと考えるのである。言いかえれば、彼等一団の個人的無政府主義者等は、性交の機会にうえているところから、世の女性のかたくな（？）な性意識を極力排斥することによって、彼等の時にしたがっての求めに対して、いと身軽るに応ずる女性を、培養せんと欲しているに過ぎない。この意味において、アチヤリイヤ氏等の団体および運動は、むしろ彼等の否定している所有欲と、同時に彼等の戦いの的であるかの如き嫉妬心（アチヤリイヤ氏等は女性が他の男性とかたく結合することを嫉妬する）とに根ざしているものである、とすらいうことが出来るのである。

「嫉妬心撲滅」の運動は、アチャリイヤ氏等に俟つまでもなく、従来の社会にあっても、極めて厳密に行われてきた。即ち従来の社会では、男性の嫉妬は「めめしい」といって嘲笑され、女性の嫉妬は「邪悪である」といって排斥されたのである。この毒々しい運動のおかげで、われわれは今もなお、嫉妬は恥づべき行為であると、肝に銘じて考えさせられている。しかしてかくの如き「嫉妬反対の運動」は、いうまでもなく一定の性的様式（従来にあっては生殖器の私有、アチャリイヤ氏等にあっては共有）の運行を、円滑ならしめんがためであり、そしてそれは、即ち深刻な所有欲と、それから生ずる嫉妬心（嫉妬心反対の運動こそ、その実嫉妬心に根ざしているものだ。なぜなら男女が生きた本能としての性意識によって、自主的に選択し愛着することを嫉妬して、そうした性意識を嫉妬なりと称して死滅せしめることによって、男女の性を物品的ならしめ、随時随所にあって私有し、共有するに、極めて便利のものたらしめんと、企画するにあるからだ）との社会的変形にほかならないのである。

二　性交の立場、生殖の立場

アチャリイヤ氏は、最も理想的な性交様式は、男女の随時随所における性的衝動をごく自由に、手軽るに、満足させうるものでありたいというにあるが、こうした欲求こそは、性（特に女性の生殖器）を私有もしくは共有の制度によって、自由（？）に使用せんと企画するに至る根本の原因である。

従来における性の私有制度は、男性が随時随所において、その性的衝動を満すこと（用を足すこと）に事欠かないために設けられたものともいうべく、その制度の最初にあっては、一人の夫が一人の妻を、随時随所において極めて手軽るに用を足すために、携帯したことは、（携帯を許されたことは）、男性にとって極めて便利であったのである。アチャリイヤ氏等の共有制度もまた、これを少しも違わない動機と目的とによるものである。

いったいこうした動機や目的は、性を「性交」の本能 — 即ち男性の立場からのみ見た場合のものであって、男性にとっては、性は性交欲の満足が全てであるからである。故に随時随所における性交欲の衝動を、解決することが出来さえすれば、性の問題は万事終わるのである。この意味において、性の問題は男性にとって（殊に無自覚な男性にとって）（アチャリイヤ氏もいっているように）重大なものではないのである。アチャリイヤ氏はいっている。「友愛は性愛より一層高い愛である」と。

然しながら、われわれ婦人をして言わしめるならば、性は単に性交の本能からのみ見らるべきではなく、より多く生殖の本能にもとづいているものである。故にわれわれ婦人は「友愛は性愛よりも一層高い愛」などということは決していわない。「性愛は友愛とひとしき価値における愛」にほかならない。決してことさらに蔑視さるべきではないのである。松本正枝氏がアチャリイヤ氏を批評して、母性の立場を認識せざる偏狭な性思想者といったのは、全く正しい。

性の問題を、性交の立場からのみ見る時、その見方は極めて偏狭であり、且つ空想的（

さもなくば強権的）である。アチャリイヤ氏は、男女の性衝動は、いわゆる「嫉妬心」さえ除けば、随時随所に、極めて手軽るに、満たされうるものと考えている。然しながら、性が生殖の本能によって、先天的に左右されていることを知るわれわれ女性は、氏の考えを「無自覚な男性の一空想に過ぎない」と批評するほかはない。

生殖の本能は、「選択」を伴っている。例えば生物の進化は「性の選択の累積」だといわれている。われわれの「選択」は、われわれ自身のものであるよりは、むしろ自然のものである。故にわれわれは、「選択」を意識的にはしない。恋愛によって、即ち好きとか嫌いとかいう本能的の感情によって、無意識的にそれをするのである。既にこうしたことが、われわれの性関係の基礎となるものである限り、われわれの性的様式は、決して簡単に規定することはできない。アチャリイヤ氏のいうように、随時随所において、すべての女性が、すべての男性の申し出を受け入れるとか、あるいはまたすべての男性が、すべての女性の希望を満すなどということは、全くの夢である。その夢を実現せしめるためには、その夢と反対の意志をもつ自然の本能を強く束縛するところの、人為的の強権制度を必要とするのである。

アチャリイヤ氏等の運動は、結局において強権制度を期待するものである。

三　わたしはこう思う

要するに西洋におけるアチャリイヤ氏等の運動は「性交の立場」からの運動であり、日

本におけるわれわれ婦人の運動は「生殖の立場」からの運動である。両者はかくの如き根本的の相異によって、飽くまでも対立するものである。

いったい氏等のいう「嫉妬心」なるものの内容は、極めてあいまいなものであるが、氏等のいうが如き「所有者の所有意識であり、被所有者の奴隷意識である」場合のそれにしても、あるいはまた「愛を他に移した愛人、もしくはその対象者に対する怒り、または怨み、悲しみというような原始的の感情」である場合のそれにしても、氏等の目的が、真にそうした欲望なり感情なりを撲滅（もしくは抑制）せんとするにあるならば、実に氏等の運動は不聡明であるというほかはない。なぜならば、「……の撲滅」というがごとき、破壊的の行動によって、ある事物を破壊しうべしとは、われわれには考えられないからである。ある事物を破壊せんとせば、まず新しき他の事物を建設せよ！　である。建設せられたる新しき事物への転移によってのみ、古き事物は必然に破壊されるべきであろう。

わたしはこう思う。嫉妬心の複雑な問題を解決もしくは処理するには、まず男性と女性との、各々の性の性質を知らねばならぬと。即ち、わたしをしていわしめれば、男性の性は「追求」にある。すなわち男性にとっては、ある異性を真に美、もしくは魅力ありと認識することが絶対である。彼はその瞬間から「恋ひ」を所有する。男性にとって「恋ひ」は自己のものである。故に男性にとっては「失恋」なるものはない。世上にいわれている「失恋」は、「恋ひ」を失ったことではなく、「恋ひ」が求める「結合」の機会を一時失ったことをいう。ただ、ある時に「恋ひ」を感じた対象が、他の時に色褪せたものとなる

場合はある。だが、それは失恋というよりは、消恋というべきであろう。かくの如く男性の性は追求的の運動法に拠っている。（それは地を変えていえば、女性の牽引力を中心とする、宿命的の性的運動法であるということも出来る。ゆえに、それほどの牽引力ある女性を認識しない場合、男性の性運動は極めて索莫たるものである。そして牽引力の有無に対する認識は、男女の進化過程によって違ってくる）こうした性の所有者男性が、その対象者、または競争者に対して嫉妬を感ずることは、極めて当然のことであろう。男性は失うことなく「恋ひ」をしている。その「恋ひ」は結合を目ざしている。その場合その結合を妨げるすべての事物に対して、彼が不機嫌となるであろうことは、免れがたいことであるからだ。が、いかに免れがたいことであるにしても、彼はそうした心的状態を決して愉快であるとは思わない。かくてそれに対する自制的方法の必要を感じてくる。その方法は？

アチヤリイヤ氏に従えば、嫉妬心撲滅の方法は、嫉妬心を悪であるとして、ひたすらにおしつぶすにあるらしいが、むしろそれよりは、対者に対する尊敬と愛の感情によってのみ、容易に、自発的に、可能となるのではなかろうか。即ち自己との結合を欲しない女性の立場、あるいはその女性が結合を望んでいる競争者の立場を理解し、尊重するときにのみ、彼は始めて彼女との結合の機会を一時見捨てることができるのである。即ち彼における嫉妬心はかくして抑制されるのである。

また、女性にあってはどうであるかというと、女性の性の性質は、男性のそれに反して、「自己に対する分裂せざる真摯なる男性の愛」を基礎とし、その愛の所持者男性の中の、

最も男性的の男性（彼女の心が最も愛し慕う男性）と結合することを目的とする運動法によるものである。故に女性にあっては、「愛される」もしくは「恋される」ということが先決の問題である。故に女性の場合における嫉妬心の問題は、事きわめて簡単である。女性にあってはその愛人の愛が、他の女性に移行したということは、既に自己とその愛人とが、はっきりと無関係になったということである。もし女性にして、真に自己の性に目ざめるならば、嫉妬心などということは、少しも問題ではないのである。されば女性に対しては、「嫉妬心の撲滅」などということよりは、「自己の性に目覚めよ！」という運動こそ必要である。

かくのごとく男性にあっても、女性にあっても、「嫉妬心（その内容のいかんにかかわらず）の撲滅」などという破壊的の運動は、結果的に無駄な運動であって、アチヤリイヤ氏等の目的が、真にその言葉の意味するようなものであるならば、他の建設的の運動——男性に対しては尊敬と愛、女性に対しては自己の性に目覚めしめることこそ、最も聡明な運動の方法であろうとわたしは思う。

だが、氏等の目的は、もちろん単なる「嫉妬心の撲滅」ではなくて、「性の共有」にある。ここに至ってその運動は、極めて強権主義的であり、反女性的である。氏等の運動に好意を有する女性、もしくは参加する女性が、もし西洋にあるとすれば、われわれ東洋の婦人は、彼女達の無自覚、無知、無見識を責めると同時に、自覚へと勧告する努力を惜しまないであろう。終りにのぞんで、氏等の運動に対して闘争の口火を切った、同志松本正

枝氏の労を、多とするものである。